

大通公園を望む窓辺から

無名橋

常任理事 岡部 實裕

層雲峡を越え、車で上川から北見へ向かう途中だっただろうか、小さな橋があった。「無名橋」と記されていた。とっさに、「ああ、阿部公房」という言葉が口をついた。昭和22年5月に彼が出版したガリ版刷りの「無名詩集」を思い出した。50円で売り出し、北海道にも戻り、売りまわったがさっぱり売れなかったらしい。詩人としての感性を持ち合わせていたことが画像と言語をつなぎ、「阿部公房の文学は映像的である」と評されることとなったのだろうか、山道を車で走りながら、若き日の彼の生き方と人間科学へ向けた挑戦へと思いをはせた。彼は「無名詩集」の屈辱から、文学の「パラダイム・シフト」を目指して走り続けたに違いない。

トーマス・クーンは「科学革命の構造」という名著で、「パラダイム」＜科学者たちが、暗黙のうちに、研究の指針とする手続きや考え方の集大成＞という流行語を生み出したという。「2025年モデル」や「医療イノベーション」等等、医療のパラダイム・シフトが叫ばれている。パラダイム・シフトとは、「規範的科学」と対峙し、科学者たちは古いパラダイムを捨てて新しいパラダイムに乗り換えることらしい。ジョン・ホーガンは、「科学の終焉」の中で、「その言葉は科学史と哲学の分野を超えてウイルスのように広まり、知識人社会全般に感染した」と揶揄した。その最悪の例として、ブッシュ政権時代に、ホワイトハウスの高官たちが「ニュー・パラダイム」と呼ばれる経済計画を推し進めたのだが、実際にはレーガンの経済政策、レーガノミクスの単なる焼き直しに過ぎなかったことを挙げている。

「無名詩集」から「無名橋」がひっそりと生まれ、公房先生の精神が上川地域でも生き続けているに違いないと夢をひろげ、未来をつくる医療を永続するためにも、「ビジョンなき手先の策」の愚に陥ることなく、もうひと踏ん張りするかと日々の病院業務に明け暮れている。

人生の質

理事 倉増 秀昭

今夏、この北海道で最も素晴らしい季節を満喫すべく私は、家族を連れ富良野へ旅行に出かけました。

富良野は大自然とそこに住む人々が共存する、いわゆる「北海道らしい」地域であり、道内外から多くの人々が訪れます。何が人々を惹きつけているのか。それは都会に住む人々が失ってしまった時間が、ここには流れているからなのではないでしょうか。ゆっくりと美しい花を眺め、ドライブをし、美味しい食事をいただく。ただそれだけの、しかし都会ではなかなか、経験できない時間がそこにはあるのです。

ヨーロッパには「クオリティ・オブ・ライフ」という言葉があります。人生とはお金がすべてではない。それに固執するあまり、もっと大事なことを見落としてはならない。それは、家族との時間であったり、自然を満喫する心の余裕であったりするという考え方です。

なので彼らは、日本人が都会思考であるのとは反対に、田舎に住むことを好む傾向にあります。また、都会に住んでいる人々も週末には、都会の喧騒から離れ、自然を満喫したり、家族との時間を大切にしています。

私は、富良野には、そのようなヨーロッパの人々が持っている価値観に似たものがあるように思います。私自身も、普段はなかなか、一緒に過ごすことのできない家族と大自然の中で、密度の濃い時間を過ごし、忙しい毎日に向けてのエネルギーを得ることができました。

ストレスを発散し、明日への活力を得ることは、何にも変えられない「薬」であると私は思うのです。

われわれも、人生の質を向上させるための「薬」となりうる、自分に本当に必要な時間と環境を選択していく必要があるのではないのでしょうか。

